

琉球大学学術リポジトリ

障害幼児の統合保育上の課題： 保育士へのアンケート調査結果より

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属障害児教育実践センター 公開日: 2008-03-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 哲雄, Nakamura, Tetsuo メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/5096

障害幼児の統合保育上の課題

— 保育士へのアンケート調査結果より —

中 村 哲 雄

Understanding Problems of Early Intervention for Infants with Developmental Disabilities.—Through Survey of Nursing Tasks for Integrated Disabled Infants

Tetsuo NAKAMURA

This paper aims to examine the problems and tasks of early intervention for infants with developmental disabilities through questionnaires given to nursing teachers in Naha city. The questionnaires consisted of following items, such as ability of the activities of daily lives, speech utterance, social relationship, body and fingers movement, and hand-in-hand behavior in emotional relations with other children. Results were as follows. About 70% of disabled children on the activities of daily life behavior were well and normal. As of speech utterance, the half of them was normal, but the others were recognized non speech and utterance. Social relationship was similar to the speech, that is, the half was normal and the rest was non. Body and fingers movement was mostly no problems found except children with cerebral palsy. Behavior of hand in hand was also good condition in nearly 70% children but other 30% were needed to give taking much care of developing emotional relationship with other children. More concrete discussions are stated in the paper.

1 はじめに

障害幼児が地域の保育所・園で統合保育されるようになって、沖縄県でも20年以上の歴史が経過した。各地で障害児の保育はほぼ定着し、安定しているように思われる。一昔前のように、地域による統合保育事業の実施状況の差はなくなった。県下のどこでもいつでも障害幼児がいると、非障害児と同じ保育所・園で保育が受けられるようになったことはすばらしい。このことは障害児保育のシステムが、今や全県下で確立し、量的な拡大が実現したということの意味している。

ところで、障害児保育が盛んになり一般化したことは好ましいことだが、障害児保育の量的拡大に伴って、その質的な面の向上・変化が起こっているのかどうかとなると、疑問がなしとはいえない。統合保育のシステムが整い、保育士達のその取り組みに対する意識改革がなされているように思われるが、保育士達が障害児保育の過程でかえる保育上の悩みは、依然とそれほど変わっていないように思われる。日ごろ巡回指導員として保育所・園を訪問指導する際の、保育士達の提示する課題や悩みの実態からして、20年前と変わっていないように思われるからである。そのことはシステム造りのようなハード面の整備よりも、保育内容や保育方法に関するソフト面に対する取り

*Faculty of Education, Uni. of the Ryukyus

組みが容易ではないことを意味しているようである。また組織としても縦軸に沿った実践の積年化・共有化も体系化するのが困難な状況にあるということを示している。

さらには統合保育される対象の障害児自体が、例年重度多様化してきているという問題も関係しているだろう。重度・多様化は、保育方法上、常時新しい対応や方法を必要としているようだが、体系の積年化を困難にしているようにも思われる。つまりそれは保育士達が「昨日の知識や対応法が今日は通用しない」というような現実を、障害児保育では常に実感しているということの意味している。

本調査では、障害児が示す問題行動は、以前も今も変わりなく保育士達の悩みの種であるということ、保育所・園の保育目標及び実態評定表に基づいて、分析を試みた。これにより保育士達が保育上の悩み課題を把握し、保育方法の改善に繋がることを希望したい。

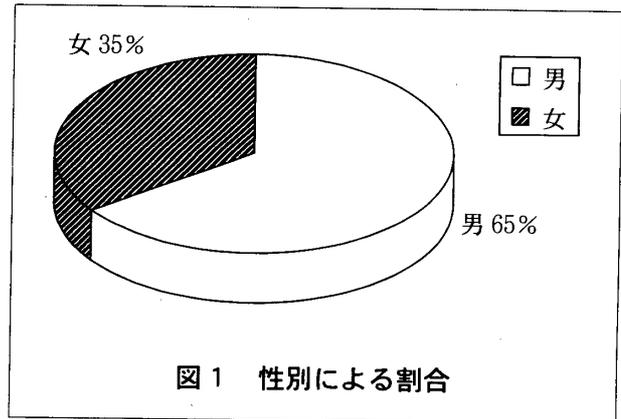
2 調査の方法

- 1) 対象地域・期間：調査の地域は、障害児統合保育を20年以上実施している那覇市と対象とした。調査の期間は、平成9年～13年の5年間とした。
- 2) 対象人数：対象とされた障害幼児は障害種別込みで297名であった。その障害種別による内訳と人数は表1に示すとおりである。

表1. 障害幼児の内訳

障害名	知的発達遅滞	自閉的傾向児	ダウン症児	言葉のおくれ	脳性まひ児	聴力障害児	視覚障害児	その他	合計
人数	129	48	41	38	30	2	1	8	297

- 3) 男女の比率：統合保育された297名の男女の内訳は、図1に示す通りであった。この図によると男児が65%で女児35%となっていて、圧倒的に男児が多いという結果となっていた。



- 4) 保育目標及び実態評定：那覇市では障害児が保育所・園に入ってくると、1か月かけてその生活・行動実態を把握している。個別の年間目標を設定しているの、これによって一人一人の保育目標の分析をした。なお生活実態の評定は、予め示されたチェック項目を5段階（大変よくない、よくない、普通、よい、大変よい）で評定することになっている「生活実態評定表」に拠った。チェック項目は「身辺自立」、「ことば」、「社会性」、「情緒」、「運動」の5領域、12項目であった。なおこれらのチェックリストに基づいて、3つの主たる障害である「知的発達遅滞」「自閉的傾向」「脳性まひ」については、それぞれ70%、16%、10%なっていて、全体に占める比率が高いため、特に目標行動の調査をし、比較検討をした。

4 調査結果

1) 保育目標の分類

保育士達が示した年間の指導目標行動に関し、主たる3つの障害である「知的発達遅滞」、「自閉的傾向」、「脳性まひ」について分析した結果は、図2～図4に示した通りであった。これらの分析結果は以下に示した。

(1) 発達遅滞児について

知的発達障害児の保育上の課題・問題は、図2に示す通りであった。この図から課題・問題として挙げられた事項の最も多い順に示すと「身辺自立」と「ことば（発語・発声）」と「社会性」が約20%前後となっていて、ほぼ同程度の比率となっていた。これらの間には有意差が

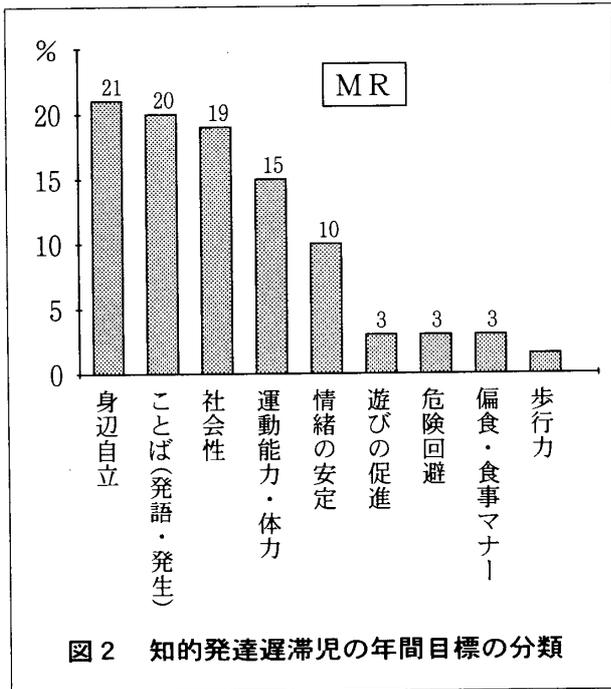


図2 知的発達遅滞児の年間目標の分類

なく、3つを合わせると全体の約60%を占めていることが解かる。それ以外では「運動能力・力」が15%、「情緒の安定」が10%と続いている。その他は「遊びの促進」、「危険回避」「食・食事のマナー」、「歩行力」となっている。この事実から発達遅滞の障害幼児の場合、特に身辺自立、ことば、社会性の3つの領域の課題・問題を予め想定し、この面の研修や保育方法を専門的に取り組んでおくことが重要なことといえよう。

(2) 自閉的傾向児について

自閉的傾向児の年間指導目標の分析の結果は、図3の通りであった。この表によると自閉児の課題・問題は、最も高いのが「社会性」と「身辺自立」であった。両方とも同率で全体の23%となっていて、両方を合わせると約50%となり、目だって高い比率を占めていることが判明した。ついで「変色・食事」と「ことば・発語」が、これまた同率で両方とも14%であった。それ以外は「運動能力」「遊びの促進」「こだわり」「情緒の安定」となっていて、比率はいずれも3%となっていた。これらの結果から、自閉的傾向児の行動問題や課題は、人や集団における社会的な関係性と身の回りの処理に関する生活技能面の留意・育成が肝要ということになるのではないだろうか。特に自閉症は社会性につい

ては診断的事項の中にも挙げられているので当然の事かと思われるが、身辺自立に関しては、予想外の課題・問題とさるものである。それだけに統合保育の際、この面の保育課題を見落とさないことが重要な示唆となろう。

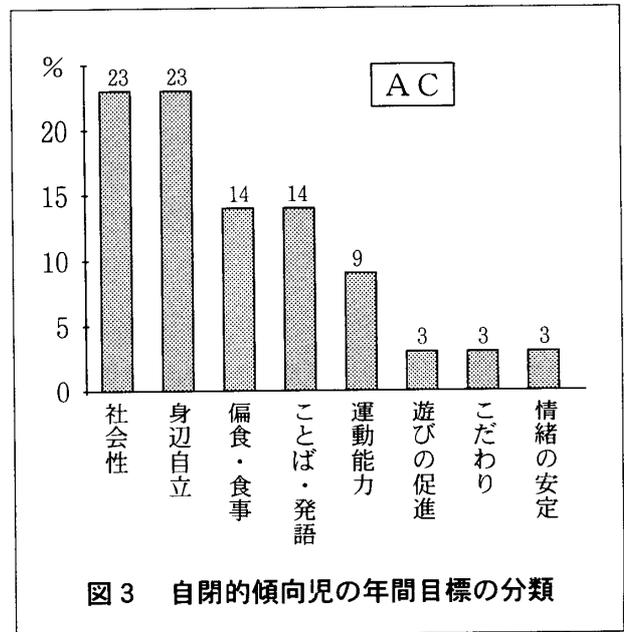


図3 自閉的傾向児の年間目標の分類

(3) 脳性まひ児について

脳性まひ児の年間の目標分析の結果は、図4に示す通りであった。表4から脳性まひ児の場合、以下のことが明らかになった。つまり最も高い年間の課題・問題は「運動の向上」で、こ

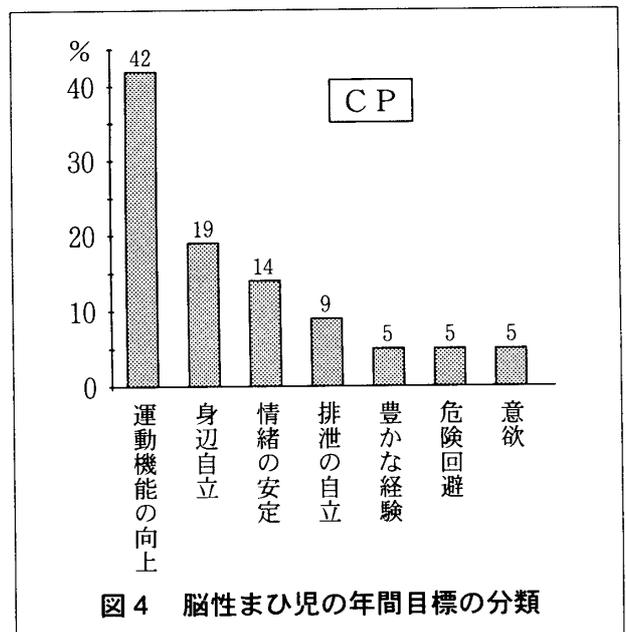


図4 脳性まひ児の年間目標の分類

れだけで全体に占める比率は42%となっていた。脳性まひ児は、その障害の主たるものが運動に関わるものである点からすると、この結果は当然のことといえよう。

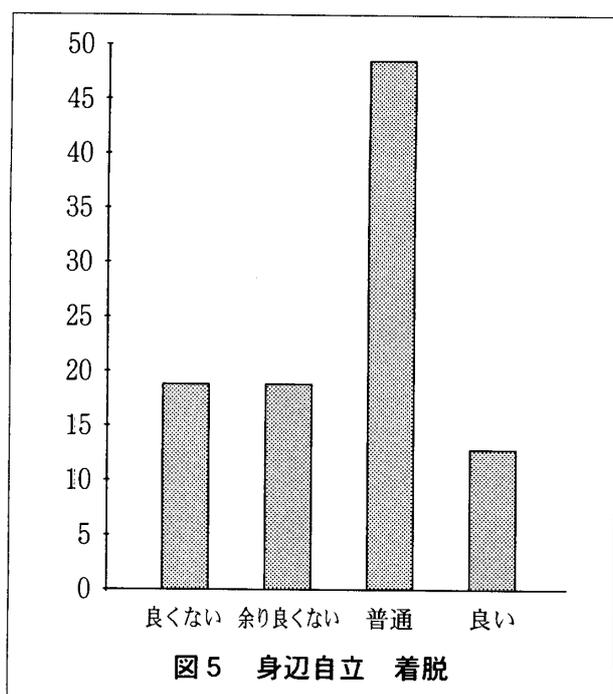
ついで高い順に示すと「身辺自立」で19%、「情緒の安定」が14%、「排泄の自立」が9%となっている。それ以外では「豊かな経験」「危険回避」「意欲」で、いずれも5%となっていた。特に運動以外では身辺自立が課題となっているが、これも運動障害があると生活技能面の遅れが生じるのは当然のことなので、課題としてはかなりの配慮が必要となろう。

2) 生活実態調査の結果

生活実態調査としては、以下の事項を先に示した5段階評定によりチェックしてもらった。チェックした項目は身辺自立に関しては「着脱」「安全」「保清」「食事」「排泄」「健康」「睡眠」の7項目と、「ことば」、社会性の「人との関係」、情緒の「てつなぎ」、運動の「全身」と「手指」となっていて、全部で12項目であった。これらの個別的結果については、以下に図5～図15に示す通りであった。

(1) 身辺自立の「着脱」について

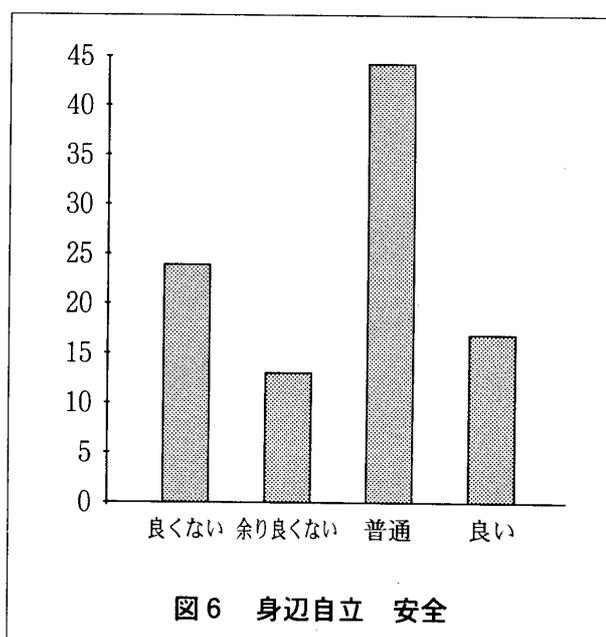
身辺自立の中の「着脱」に関する調査結果は、図5に示す通りであった。この図によると統合



保育された障害児は、「普通」および「よい」を合わせて半数60%以上の子供が着脱では問題ないようである。その他、問題があるのは約34%なので、3割程度の子供は日常の衣服の着脱で、親や保育士の介助が必要とされていることが判明したことになる。日常の生活では衣服の着脱は、最も基本的な生活技能の習得として重要な能力であるだけに、約6割の子供が自立的であるということはよしとされよう。

(2) 身辺自立の「安全」について

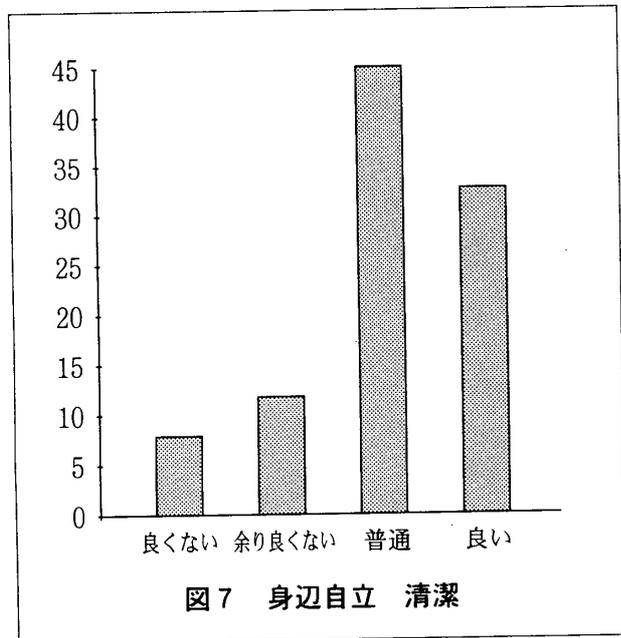
障害児の保育所・園における「安全」面の調査結果は、図6に示す通りであった。これによると、「普通」及び「よい」を合わせると約60%となっていて、統合保育するのにほとんどの子供が問題ないという結果となっている。障害児の統合保育への抵抗感があるとすれば、この「安全」面の問題が最も気になる点であろうが、実態は問題はないという状態にあるというのが判明したことになる。この点、統合保育の拡大化に重要な指標となるものと思われる。しかし、そうは言っても、この図によると「安全」面で常時心配りをしなければならない子供が約40%もいることも明らかにされている。この数字が高いのかあるいは低いのかは判然ではないが、かなり高いという印象を保育士達に与える数値のようでもある。したがって安全面では、親や保育士がナーバスになって、統合保育



する際の苦情を述べる背景要因となることも考えられる。

(3) 身辺自立の「保清」について

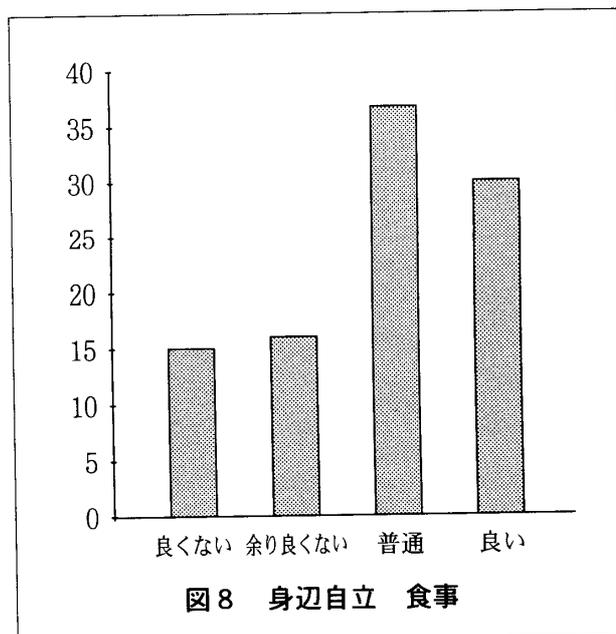
子供の清潔感、さっぱりした印象を周囲の子に与えることは集団生活をする上で大切な要件である。障害児でもこの点は同様である。したがってこの点に関して障害児のみに保育上のチェック要件としたことは、必ずしも正当な見方とは言えないだろう。この事項は今後は検討される必要があるが、子供の「保清」は障害児の場合、特に介助を要するのであれば、その面の配慮がおろそかになると困るので、チェックしたという程度に捉えた方がいいだろう。そういう観点から見ると、今回の調査結果を示した図7では70%以上の子が問題はないということが明らかとなったと言える。逆に「よくない」と言われる子供は、20%以下となっているので、「保清」に関しては統合保育上、特に問題にすることはないと言える。恐らくこの数値は非障害児の場合とほとんど変化はないものと思われる。



(4) 身辺自立の「食事」について

食事に関する問題は、障害児の場合、大きな課題の一つである。食事の場合、図8によると、「普通」と「よい」を合わせると約67%になっている。これから障害児の多くは食事指導でそれほど問題はないと言える。問題となるのは

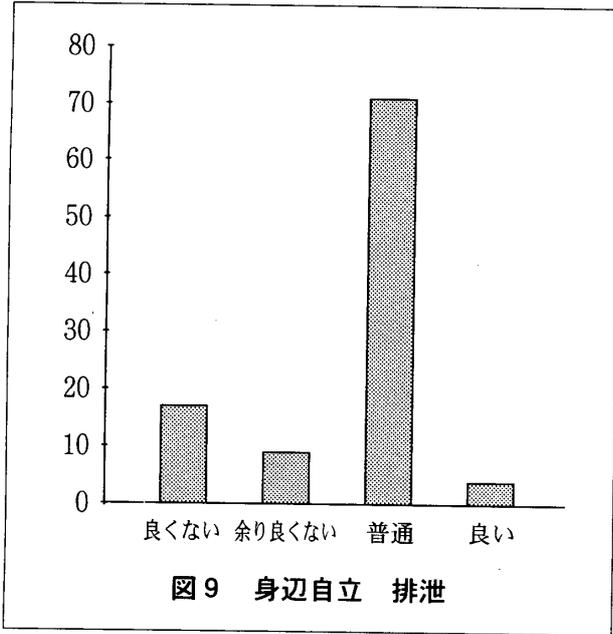
「よくない」と「余りよくない」を合わせると、約30%である。これらの子供は食事の問題としては、偏食や食べこぼしやマナー等の問題が絡んでくるので、保育士達の苦労は大きい。特に食事の問題は、健康維持との関連で、保育士達がナーバスになりがちになるのを考えると、3割はあながち少ないとは言いがたい面がある。3割の子供達については、親・家庭との協力を得ながら解決していかなければならないだろう。



(5) 身辺自立の「排泄」について

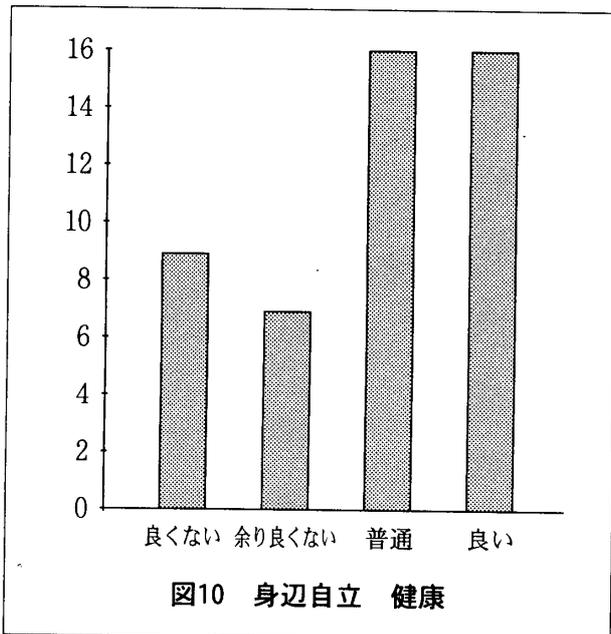
障害児の「排泄」の課題は、図9に示す結果となっている。この図によると「普通」と「よい」を合わせると、70%以上の子供が排泄に関しては問題はないという結果が示されている。排泄の問題も障害児保育を受け入れる際に、大きく問われる課題の一つであるので、この結果からするとそれほど気にする必要はないと言える。逆に「よくない」と「まあまあ」の両方を合わせたのは、22%前後となっている。約2割の子供には排泄の自立の問題が課題としてあるので、この面の関わりを予期して保育に当たることが求められよう。

家庭と保育所・園がここでも協力態勢で望むことが必要となっている。



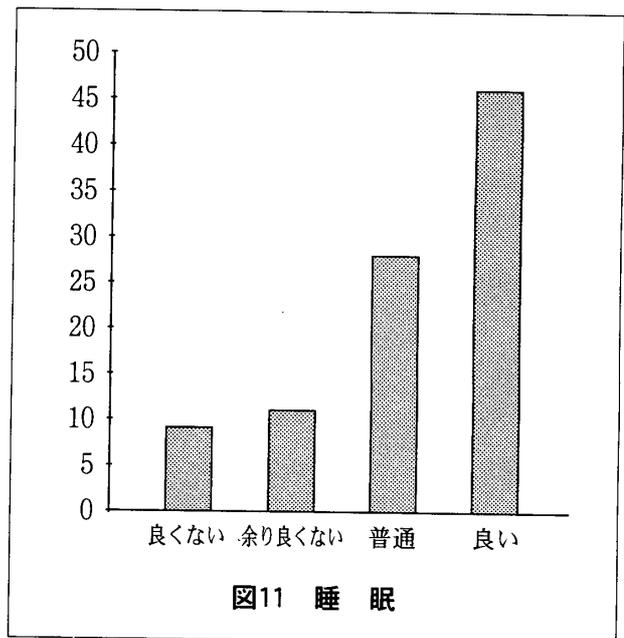
(6) 身辺自立の「健康」について

この「健康」の調査事項は、障害以外にそれに関連して健康上特に留意すべき点があるかどうかをチェックするものである。図10はその結果を示したものである。これによると健康度が「ふつう」以上の状態にある子供は約80%となっていて問題はない。特に留意する必要がある子供は、「よくない」と「まあまあ」を合わせて約20%となっている。全体としては保育する上では、それほど健康面では不安はない子供が多いということが判明したと言えよう。



(7) 身辺自立の「睡眠」について

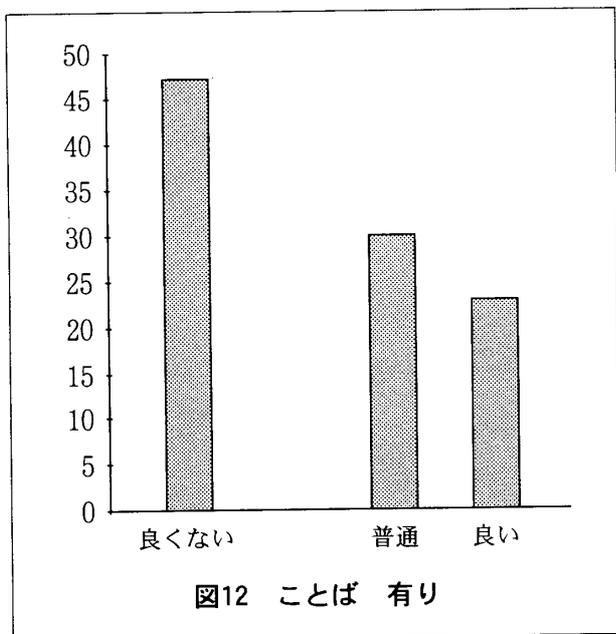
保育所・園では、昼寝の時間が設定されている。この時間に保育士達は事務的な業務を行うので、昼寝をしない子供がいると、その分私的な時間が割かれることになる。それ故子供たちが一齐に昼寝をしてくれることが期待されている。その点、障害児はどうなのかを把握するために調査したのが図11である。これによると障害児の睡眠は「普通」及び「よい」を合わせると70%以上の子供が問題ないようである。問題があると思われる子供は、「よくない」と「まあまあ」を合わせると20%以下となっている。しかし、これらの留意児達の場合、ほとんどが自閉的な傾向児と思われるので、行動の予測と対応が可能と考えられるので、睡眠時間の取り扱いに不安はないだろう。



(8) 「ことば」について

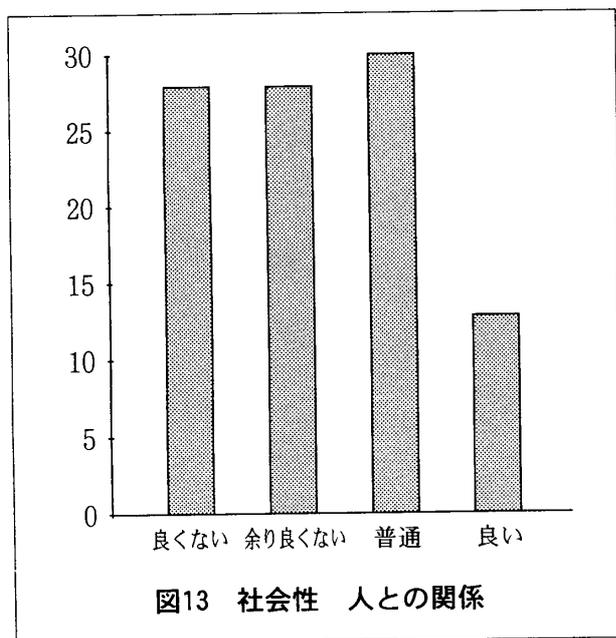
障害児にとってことばの問題は、発達指標として重要である。これは障害児の種別を問わず、課題・問題とされるからである。那覇市の統合保育対象児の場合、図12に示すような結果を得た。この図によると「ことば」の発達は、遅れが「ある」と「ない」で観ると半々となっていることが解かる。つまり「ことば」が有るが約50%、「よくない」が約50%と分かれているということである。このことから障害幼児の抱え

る問題としては、「ことば」は重要な課題であると言えよう。他児や保育士とのやり取りや指示への反応は、ことばによるコミュニケーションが基礎となるものだけに、ことばの発達は保育士達の取り組むべき重要な視点と言えよう。



(9) 「人との関係 (社会性)」について

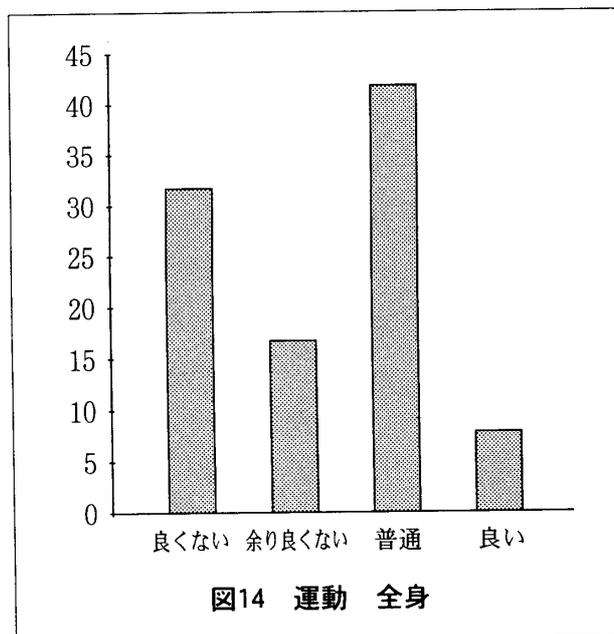
障害児の統合保育の重要性は、障害児と非障害児の自由な伸び伸びとした交流や関わりにある。それらがなければ統合の意味がなくなる。そういう観点から障害児の社会性をチェックす



ることは、保育する上で重要な予備知識となる。その実態を示したのが図13である。この図によると障害児達の仲間関係の能力は、「よくない」が27%、「余りよくない」も27%となっていて、両方を合わせると約54%となる。このことから障害児の場合、その半数が社会性面の発達に課題があり、保育上、保育士達の特段の配慮が必要であるということになる。なお「ふつう」および「よい」は、両方を合わせると約42%となっていた。これはかなりの子供達は、仲間関係に問題はないということも示していると言えよう。

(10) 運動の「全身」について

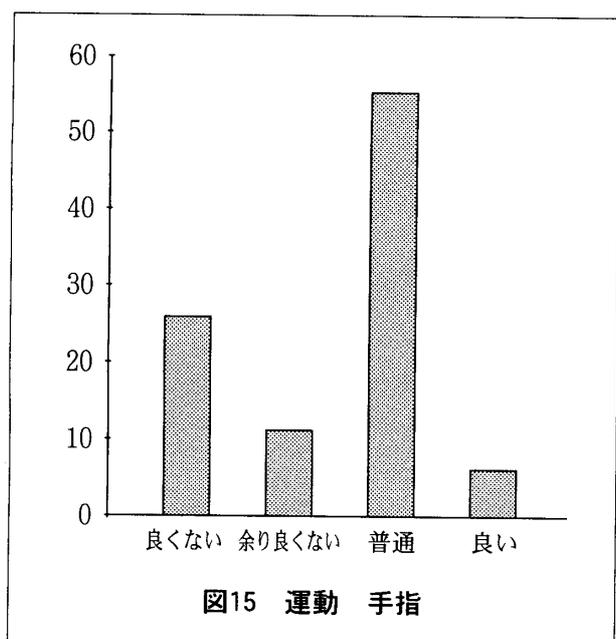
運動面の発達に関しては、特に脳性まひ児の場合は別として、それ以外の場合は問題はないのではないかという感がある。しかし実態は知的な発達遅滞児でも、運動面に関しては遅れが見られる場合が多い。ここでいう全身運動面の能力は、歩く、走る、跳ぶ、昇り降り、さがる、滑る等々の全身的な運動に関連した動きを指している。図14はその結果を示したものである。この図によると「よくない」と「あまりよくない」の両方で、約45%となっている。これは統合保育される障害児の約半数は、運動の全身的な動きに問題・課題を抱えているということを示している。障害児達の生きる力を高めるには、この全身的な運動能力を強化する必要があることは言うまでもないことである。



なお運動面に問題のない子が半数もいるということは、統合保育する上で非常に心強い実態と言えよう。

(11) 運動の「手指」について

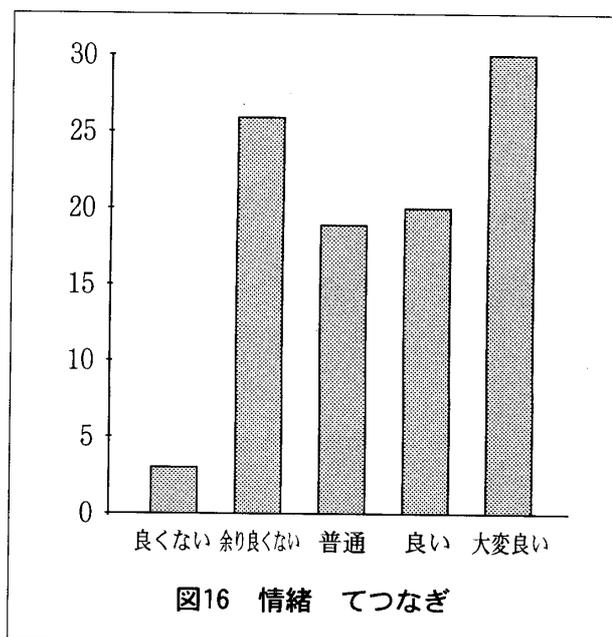
手や指の使用や動きに関しては、特にものを製作したり描がいたり、あるいは把握したりする際の器用性と関連がある。手指の問題は、先の全身的な運動能力と深く連動してはいるが、独立的な面も強い。その調査結果を示したのが図15である。この調査結果によると、手指に関して「よくない」および「あまりよくない」のは、約35%程度である。これに対して「普通」以上の子は、約60%もいるので安心させられる。手指の使用の遅れた子に対しては、特に食事の際に食べこぼしやマナーの点で留意することが求められる。



(12) 情緒の「手つなぎ」について

情緒は社会性の問題とも関係している。特に幼児期の仲間関係の育成は、手つなぎによる情緒的連帯感が育っているかどうか重要である。子供は幼児期の場合、心身の発達が十分でないので、親や保育士や年長児達による「手つなぎ」という形でのサポートが必要である。その発達は筆者の体験から子供対親→保育士→特定の子→複数の子→不特定の子、という発達順序を経て育成されると考える。そのための調査が図16

に示す結果である。この図によると、約30%の障害児に仲間との「手つなぎ」に課題があるということが判明したことになる。しかし仲間とは手つなぎをしない子でも、大人とは問題ない場合が多いので、その面から発達を促す試みをして行く事が重要な視点となる。保育所・園では手つなぎの場面は多い。例えば散歩時、移動時、遊戯時等である。手をつながせるのは容易だと思われがちだが、そう簡単でない点に留意することが重要である。



5 まとめ

統合保育を受けている障害児幼児の行動に関して、保育士達の提示した問題を目標及び問題実態を調査分析した。それらをまとめると以下の通りであった。

目標設定の調査について

- 1) 発達遅滞児の目標としては、特に「身辺自立」「ことば」「社会性」の3つの領域の課題が最も多く提示されていた。その結果、障害児統合保育する事前の研修課題として、この面の学習が重要であるということが指摘された。
- 2) 自閉的傾向児では、「身辺自立」の能力と、「社会性」が最も多かった。これにより自閉的

傾向児では、人や集団における社会的な関係性や身の回りの処理能力の育成が重要視されることが指摘された。特に社会的な能力に関しては、当然の課題とされることが予期されたが、「身辺自立」も同様に重視することが強調された。

- 3) 脳性まひ児の場合は、予想通りに最も高い率のものが「運動の向上」であった。ついで「身辺自立」「情緒の安定」であった。このことから脳性まひ児の問題は、生活能力の遅れは、運動能力の障害に起因しているのが多いので、その面の配慮が優先される必要があると指摘された。

生活実態の調査について

- 1) 身辺自立の「着脱」では、大半の障害児が評定の「普通」または「よい」となっていて、その比率は60%以上となっていた。そのことから「着脱」では殆どの子達が自立していて、手がかかるのは30%程度であることが判明した。
- 2) 身辺自立の「安全」では、これも「普通」と「よい」が60%以上となっていて、大半の幼児が問題はないことが指摘された。しかし「安全」の問題は、命に関わることなので、多い少ないの問題よりも、40割も常時安全のことに気を配らなければならないことに注目する重要性が指摘された。
- 3) 身辺自立の「保清」については、特に障害児だからこの事項が問題にされることはないだろうということが指摘された。しかし、障害児の場合、親のカウンセリングが必要とされる場合があるので、この面の調査の必要性が説かれた。実態は70%以上の子は問題なしとなっていたので、清潔面の課題は特別視する必要がないことが明らかになった。
- 4) 身辺自立の「食事」については、こちらも「普通」と「よい」を合わせると7割近いということになっているので、問題はないことが明らかにされた。しかし保育士達は子供達の健康を気にして、問題のある子が3割でも、かなりの心的ストレスを感じだろうということが指摘された。
- 5) 身辺自立の「排泄」については、7割の子供達は問題ないとなっていた。これは予想に反して高い比率で自立していることが明らかにされた。「排泄」は子供の心身の緊張により、リラックスができない子供に遅れが出る場合が多いので、この面の配慮と家庭との連携の重要性が指摘された。
- 6) 身辺自立の「健康」については、約80%以上の子供達が健康上は問題ないということが判明した。統合保育するのに健康面からは心配ないことは明らかにされた。
- 7) 身辺自立の「睡眠」については、70%以上の子に問題はないということが判明した。睡眠の問題も統合上特に心配はないが、30%の子供達には多少配慮しなければならないことが指摘された。
- 8) 「ことば」については、発語があるかないかで見ると、ほぼ半々に分かれていることが判明した。このことから障害児の抱える問題の中では、ことばの問題が最も重要であるということが指摘された。またことばは言うまでもなく子供同士、子供と大人の意思疎通を図る上で重要な機能を持つものゆえ、この面の対応の重要視も指摘された。
- 9) 「人との関係」については、「よくない」と「あまりよくない」を合わせると、約54%となっていた。このことから「ことば」同様、障害児幼児の場合、社会性の問題は重要な課題・問題だということが判明した。保育士達はこの面の配慮とその育成法に関心を払う必要性が強調された。
- 10) 運動の「全身面」については、「よくない」と「あまりよくない」を合わせると約5割の子に課題・問題があることが判明した。運動面の能力は子供の生活力、生命力の源泉と深く関わっているため、そのアップは重要なテーマであることが指摘された。
- 11) 運動の「手指面」については、約60%の子供達が問題ないという結果を得た。このことから障害児達は、運動面にはそれほど統合上の問題はないことが指摘された。しかし手指の課題で配慮する必要のある子供達が4割もいるということは、それなりにその発達促進に留意する必要があることが強調された。
- 12) 情緒の「手つなぎ」については、約3割の子

供に課題・問題があることが判明した。手つなぎの行動は、誰でも可能な行動とみなされがちであるが、それには発達があるのでその面の育成に留意することが強調された。

参考文献

1. 扇子幸一、伊藤則博編集代表、北海道導乳幼児療育研究会編著. 早期療育、北海道システムの構築と実践. コレール社、1999.
2. 障害児保育方法研究会編、治療教育講座、障害児保育の理論、中央法規出版、昭和58年
3. 障害児保育方法研究会編、治療教育講座、障害児保育のカリキュラム、中央法規出版、昭和58年
4. 宮下俊彦、佐々木正美、荒木直弼、鴨飼百合子編、問題別保育実践シリーズ(1)、障害児保育、全国社会福祉協議会、昭和59年
5. 萩吉康、松坂清俊、水山進吾編、障害児保育、福村出版、1986